

「保育者の指導力向上に向けた支援」

幼児期の教育を取り巻く喫緊の課題は、大きな視点で見ると「保育の質の向上」と「働き方改革」の2つあると言えるのではないのでしょうか。

「保育の質の向上」については、教育要領等の改訂や幼児教育・保育の無償化、そして令和5年度の創設に向けて動きが出てきた「こども家庭庁」など、これまで以上に幼児期の教育に注目が集まり、質の高い教育・保育の提供が望まれてきている背景があります。また、幼児期の教育の充実が、その後の長い人生に強く影響を与えていることが、国際的な比較・分析、種々の研究から明らかになっています。東京大学発達保育実践政策学センター（CEDEP）は「OECD幼児教育・保育白書第6部」を基に、「国際比較の知見を通じて日本の幼児教育・保育の在り方を考える公開シンポジウム（2021年9月10日）」を開催しました。その中でシュライヒャーOECD教育・スキル局長は、カリキュラムや保育従事者の質を念頭に置き、「子供たちが自ら考え、自分たちで他者と共に生き、この地球という惑星と共に生きることが出来る大人に成長できるよう、幼児教育・保育は社会の変化や将来予測される困難に敏感でなければならない（CEDEP Webページより）」と述べています。これは保育の質の向上が、子供のレジリエンスを育み、生涯の幸福感を支えていくということを示唆していると捉えられます。

上述のように「保育の質の向上」を図ることが重要とする一方、保育現場では「働き方改革」の実現が、保育者不足や離職、心理的・身体的健康問題等を乗り越える手段であるとの認識も高まっています。

このようなニーズに資する調査研究の必要性を感じ、幼児教育センターでは令和3年度から「保育者の指導力向上に向けた支援」をテーマに掲げ、研究活動を行っています。

<研究の目的>

環境に関わり遊ぶことを通して、幼児に「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を育てていくための幼児教育施設における指導の改善方法を提案し、保育者を支援する。

<研究の内容>

- 幼児期の教育はどのような“しくみ”で構成されているのか
 - 「ねらい」・「内容」・「環境の構成」の関係性と具体的な記述方法
 - 指導計画と保育の実際
- 幼児理解を深めるために、ICTをどのように活用するのか
 - 記録の効率的な記述
 - ◆ ドキュメンテーション・音声入力
 - ・ 保育記録
 - ・ エピソード記述→保育カンファレンス
 - ・ 指導計画（週案等）の「幼児の姿」
 - 伊勢崎市立第一幼稚園との共同研究
 - ・ 保護者支援
 - 効果的な分析・活用
 - ◆ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を窓口にして分析
- 「遊ぶ」「生活する」ことは、幼児にとってどのような意味があるのか
 - 行事との関係
 - 言葉・文字・運動・音楽・描画等との関係
- 環境としての保育者の存在は、幼児の発達にどのような影響を与えるのか
 - 潜在的カリキュラム
 - 同僚性

※赤：既に、研修講座や保育アドバイザー派遣による伊勢崎市立第一幼稚園との共同研究で、動き出している内容

※青：次年度以降に開始する研究内容